

研究ノート

『シメオーノフ年代記』の世界

—— 数量的分析 ——

加藤 一郎

Мир Симеоновской летописи

Ичиرو Като

はじめに

本小論で数量的な分析の対象とする『シメオーノフ年代記』は、『トロイツカヤ年代記』とともにモスクワ公国によるロシアの統一が進行していた15世紀後半から16世紀初頭にかけて編集された代表的年代記である。その名称は、現存する唯一の写本の保管者が、モスクワの「君主の書籍・出版部司書」(книжный справщик у государева книгопечатного дела)であったニキフォール・シメオーノフであったことによる。全体は578丁で構成されているが、最初の8丁はルーシの府主教、大主教、主教たち、およびリュールクからドミートリイ・イヴァノヴィチ(イヴァーン3世の息子)までの諸公のリストである。したがって年代記の本論にあたるのは、「リャザン諸公、ロスチスラーヴィチ一族に対する大公フセヴォロトの勝利」という1177年の事件に始まり、1493年のリャザン市の大火に終わる9丁から578丁ということになる。また、この年代記に登場する人物の数をまとめると表1のごとくとなる。

年代記自体のテキスト・クリティークや様々の年代記相互間の関連の分析については、

19世紀以来、シャフマートフなどの碩学によって進められており、この問題は筆者の能力及ぶところではなく、それゆえ本小論の分析の対象ではない。

本小論の目的は、この『シメオーノフ年代記』に登場する人物・民族(国家)・事件を数量的に分析することによって、(1)年代記という中世の歴史叙述はいかなる人物・事件に比重を置いているのか、それは現代の歴史叙述とどのように異なっているのか、(2)年代記はいかなる国際関係を重視していたのか(あるいは重視していなかったのか)を探求すると同時に、これを踏まえて、中世ロシアの歴史観にアプローチすることである。こうした目的を達成するために、本小論は、①『シメオーノフ年代記』の全体構成と諸事件の数量的な対応関係、②年代記のなかでのロシアおよびその他の外国の位置と比重、③年代記に登場する人物の位置(職種)・階層などを数量的な処理の対象とすることとする。

なおテキストとして使用したのは、Симеоновская летопись, ПСРЛ, том 18, СПб., 1913.である。

最初に、年代記が約300年にわたる中世ロ

シアの諸事件を記述するにあたって、どのような時期に比重を置いているのか、あるいはどのような人物に焦点をあてているのか数量的に表示し、同時に、現代の歴史記述と比較していかなる特徴を持っているのかを分析してみよう。

表2は、10年を単位として、『シメオーフ年代記』(実線)と現代の歴史叙述(点線)の割り当て頁(丁)数(行数)の折れ線グラフである。ただし現代の歴史記述といっても、今日の通史や概説書は完全にクロノロジカルな形式で、すなわち年代記のように「……年に……」(「В лето ……」)といった形式で記述しているわけではないので、ここでは、ドイツで1981年に刊行された年表『太古から1917年までのロシア史年表』(Daten der russischen Geschichte von den Anfängen bis 1917, München, 1981)を現代の年代記のかわりとして使用することとする。この年表は総頁数322頁にも及ぶ浩瀚なものであり、『シメオーフ年代記』の対象期間(1177-1494年)に限ってみても、その期間に40頁を割いているので十分比較の対象となりうると思われるからである(とはいっても、頁(丁)数の総量にかなりの差があるので、年代記の方は丁数を、年表の方は行数をそれぞれ基本単位として比較した)。

表3は、年代記のなかで、強調文字で(現代風にいえば横倍角)で表記され、事件の表題として扱われているものを整理したものである(下線部はとくに宗教的な事件をテーマとしたもの)。

表4は、年代記に登場する人物を、登場回数が多いものから(20回以上)整理し、その地位などを付記したものである。

表5は、年代記に登場する外国人のなかで最多集団となっているモンゴル・タタール系人(正確に言えば、キプチャク汗国およびその後諸汗国に帰属していると考えられる人々)を、登場回数が多いものから整理し、

表1 登場人物と男女比

単数	1560人
複数	12組
件数	1572件(男性1486件：94.5% 女性86件：5.5%)

表2 年代記(実線)と現代の年表(点線)の記述の分量(10年単位)

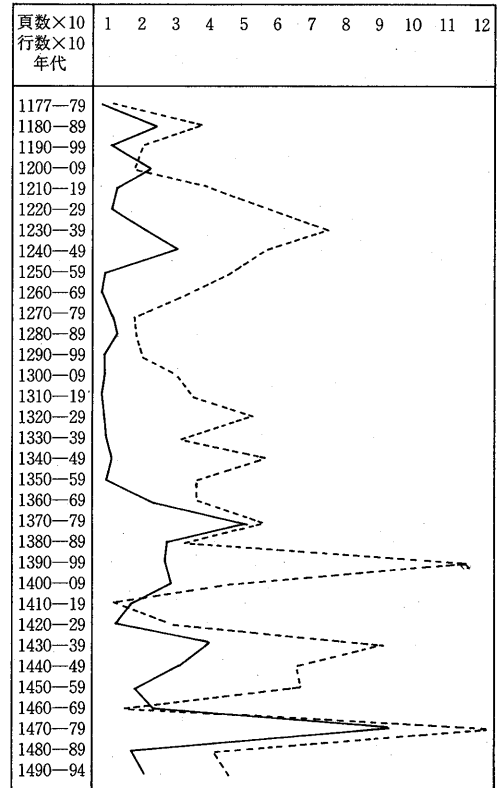


表3 年代記で強調されている事件項目

年	項目
1177	大公フセーヴォロトのリャザーン諸公ロスチスラヴィチー族に対する勝利
1187	リャザーンとの講和
1193	教会の再建
1193	スーズダリの教会
1197	聖ドミートリイのイコン
1203	ガリーチのローマン
1204	チェルニーゴフ人たち
1205	コンスタンチンがノーヴゴロトへ
1205	リュウリク公の出家
1237	パトゥウの軍隊
1241	ネヴァの戦い

1241 イジェルスカヤ人ベルゲーシイ
 1241 勇敢な男たち
 1241 ドイツ人とブスコーフ人
 1242 氷上の戦い
 1246 汗国における呪われた汗バトゥによるスヴァトス
 ラーフ・オルゴヴィチの孫チェルニーゴフ公ミハ
 イール・フセヴォロドヴィチとボヤール・フォ
 ドルの殺害
 1252 タタル人が大公ユーレイ・インヴァロヴィチの
 弟リャザン大公オレクを解放
 1257 リャザン大公オレク・インヴァロヴィチの死
 1269 出家
 1270 リャザン大公オレク・インヴァロヴィチの殺
 害
 1293 チュエネフの軍隊
 1300 府主教のキーエフ退去
 1301 モスクワ公ダニールがリャザンを占領
 1304 モスクワ公ダニールの死
 1327 リャザン公イヴァーン・ヤロスラーヴィチの殺
 害
 1344 モスクワ大公セミョーン・イヴァノヴィチの汗国
 訪問
 1362 大公ドミートリイ・イヴァノヴィチの治世
 1380 ドン川での大会戦
 1389 大公ドミートリイ・イヴァノヴィチの死
 1398 テミール・アクサク
 1410 ヴラヂーミルの占領
 1412 ドロゴミロヴォの教会
 1412 国王ヤガイラとヴィトフトとノーヴゴロトとの不
 和
 1417 ツァムブラク
 1417 同じこと
 1418 ツァムブラク
 1420 疫病と町
 1420 シュヴィトリガイロ
 1433 ユーレイ・ドミトリエヴィチ
 1433 セミョーン・モロゾーフ
 1433 大公ヴァシーリイ・ヴァシリエヴィチ
 1433 ユリエヴィチ一族
 1434 大公のユーレイ公への進撃
 1434 ユーレイ・ドミトリエヴィチ公と息子たちの大公
 への進撃
 1435 ヴァシーリイ・ユリエヴィチ公の大公への進撃
 1436 ウスチュークからのヴァシーリイ・ユリエヴィチ
 公の大公への進撃
 1437 府主教イシドール
 1437 ベレフの戦い
 1440 大公イヴァーン・ヴァシリエヴィチの誕生
 1441 府主教イシドールのモスクワ逃亡
 1441 ドミートリイ・ユリエヴィチ・クラスヌイ公の死
 1442 リャザンの土地でのムスターファの殺害

1445 スーズダリの戦い
 1450 ガリーチでの戦い
 1451 タタル人
 1452 大公イヴァーンのcockシェンガへの進撃
 1452 ツァーリグラートの占領
 1452 大公イヴァーン・ヴァシリエヴィチの結婚
 1453 大火
 1453 ドミートリイ・シェミャーカ公の死
 1455 スモレーンスクの聖母
 1456 リャザン大公イヴァーン・フォードロヴィチの
死
 1460 大公ヴァシーリイ・ヴァシリエヴィチのノーヴゴ
 ロトへの平和的進撃
 1460 アフマートのリャザン到着
 1461 全ルーシの府主教ヨナの死
 1461 ロストーフ大主教フェオドシイが府主教となる
 1462 大公ヴァシーリイ・ヴァシリエヴィチの死
 1464 ヨシフがケサリア府主教となる
 1465 フィリップが府主教となる
 1468 カザン
 1468 大公がチェレミス族に対して軍を派遣する
 1468 ヴァシアンがロストーフ大主教となる
 1469 大公がカザンに水軍を派遣する
 1471 前兆
 1471 ノーヴゴロト大主教ヨナの死
 1471 大公の大ノーヴゴロトへの進撃
 1471 ドヴィーナ河畔での戦い
 1472 大公が妃妃ソフィアに関して使者をローマに派遣
 1472 府主教フィリップの願いによるモスクワの聖母教
会の建設
 1473 信心深いユーレイ・ヴァシリエヴィチ公の死
 1473 大公イヴァーン・ヴァシリエヴィチの結婚
 1473 コロムナ大主教ゲロンチイが府主教となる
 1476 月
 1477 ボローフスク修道院長バフヌーチイの死
 1478 大主教と修道院の村
 1480 ルーキ
 1480 アフマート汗のウグラ接近
 1484 偉大なる町キーエフ
 1487 カザン
 1490 大公イヴァーン・イヴァノヴィチの死
 1492 アンドレーイ・ヴァシリエヴィチ公と彼の息子ド
 ミートリイ、イヴァーンの逮捕

表4 登場回数 (20回以上)

順序	人 名	民族	地位	数	備 考
1	イヴァーン3世	ロシア	大公	76	在位 1462-1505
2	ヴァシーリイ2世	ロシア	大公	46	在位 1425-1462
3	ドミートリイ・ドンスコイ	ロシア	大公	41	在位 1359-1389
4	ヴァシーリイ1世	ロシア	大公	39	在位 1389-1425
5	マリヤ・ヤロスラヴナ	ロシア	大公妃	36	ヴァシーリイ2世の妻
6	ヴィトフト・ケイストチエヴィチ	リトヴァ	大公	26	在位 1392-1430
7	ヴラヂーミル・アンドレエヴィチ	ロシア	公	25	勇敢公 クリコーヴォの英雄
8	ピョートル	ロシア	府主教	24	モスクワに府主教座を移転
9	ヤロスラーフ・フセヴォロドヴィチ	ロシア	大公	24	バトゥの遠征時の大公
10	フィリップ	ロシア	府主教	24	イヴァーン3世期の府主教
11	アンドレイ・ヴァシリエヴィチ	ロシア	公	24	ヴァシーリイ2世の息子
12	フセヴォロト・ユリエヴィチ	ロシア	大公	23	大巢公
13	コンスタンチン・フセヴォロトヴィチ	ロシア	大公	23	大巢公の息子
14	ユーリイ・ヴァシリエヴィチ	ロシア	公	23	ヴァシーリイ2世の息子
15	ダビデ	その他	国王	22	イスラエル国王
16	アンドレイ・ヴァシリエヴィチ	ロシア	公	22	ヴァシーリイ2世の息子
17	イヴァーン・イヴァノヴィチ	ロシア	大公	22	イヴァーン3世の息子
18	ボリス・ヴァシリエヴィチ	ロシア	公	21	ヴァシーリイ2世の息子
19	ヨナ	ロシア	府主教	21	ロシア教会独立時の府主教
20	アレクセイ	ロシア	府主教	21	モスクワ公国支持派の府主教
21	キプリアン	ロシア	府主教	21	モスクワ公国支持派の府主教
22	フェオフィル	ロシア	大主教	21	ノーヴゴロト
23	ミハイール・アレクサンドロヴィチ	ロシア	大公	20	トヴェーリ大公 1365-1399

表5 モンゴル・タタール系人の登場回数

順位	人 名	地位	数	備 考
1	アフマト	汗	15	大汗国の汗, 15世紀後半
2	トフタムイシ	汗	15	汗国中興の英主, 14世紀後半
3	バトゥ	汗	13	キプチャク汗国の創設者, 13世紀前半
4	ママイ	公	11	有力エミール, 14世紀後半
5	モハメッド	汗	11	15世紀前半
6	メングリ=ギレイ	汗	8	クリミア汗, 15世紀後半
7	ダニヤル	皇子	8	カシモーフ公国, 15世紀後半
8	シャヂバク	汗	7	15世紀前半
9	ヤグブ	皇子	7	タタール出身の勤務公, 15世紀前半
10	エヂゲイ	公	6	有力エミール, 15世紀前半
11	カスイム	皇子	6	タタール出身の勤務公, 15世紀前半
12	テミル=クトル	汗	5	チムール・クトルク, 15世紀前半
13	テミル=アサク	汗	5	チムール, 14世紀後半
14	マムテク	汗	5	カザーン汗, 15世紀前半

その地位などを付記したものである。

以上の表から、以下の諸点を読みとることができる。

① 表2のグラフおよび表3の表題が示しているように、年代記はキーエフ・ルーシの分解期からイヴァーン3世の時代の約300年間を叙述の対象としているが、そのなかでも14世紀後半から15世紀後半までの約100年間、すなわちモスクワ公国によるロシアの統一の時代に大半の分量を割り当てている。したがって、表3が示しているように、登場回数の上位5人すべてが、ドミートリイ・ドンスコイ(第3位)→ヴァシーリイ1世(第4位)→ヴァシーリイ2世(第2位)および妻(第5位)→イヴァーン3世(第1位)という連続したモスクワ大公で占められている。そのさい、イヴァーン3世がその誕生・結婚・死およびノーヴゴロト併合といった業績の面で、表3の年代記の表題になかで重視されているのは当然のこととしても、それにまして、ヴァシーリイ2世の年代に大きな比重が割かれている(表4にあるように、ヴァシーリイ2世だけでなく、彼の妻と息子たちもかなり頻繁に登場してきている)ことは注目し得る。ドミートリイ・ドンスコイとイヴァーン3世の時代にはさまれたヴァシーリイ2世の時代は、わが国の概説書のなかでもあまり注目を集めていないが⁽¹⁾、ドイツのロシア中世史家グスタフ・アレフはヴァシーリイ2世の時代を「モスクワ国家の歴史の転換点」として、その意義を次のように強調している。「ヴラヂーミルおよび『全ルーシ』の大公ヴァシーリイ2世・ヴァシリエヴィチの治世は、モスクワ国家の歴史の転換点である。この重要な時代の意義は通例見逃されてしまってきたが、それは、ヴァシーリイ2世の陰気ともいえる人物像が、彼の前任者や後継者の輝かしい個性と業績のなかに沈められ、埋められてきたためである。イヴァーン・カリター、ドミートリイ・ドンスコイ、イヴァーン大帝、イヴ

ァーン雷帝の名は、ヴァシーリイ・チョームヌイ(盲人)という名に言及することよりもはるかに急速に研究者の琴線をかき鳴らした。彼の息子イヴァーン3世の時代には目立った大きな成果があげられ、また事件の進行も加速化されたために、父の時代の業績は曖昧なものとしてきた⁽²⁾。

宗教史あるいは聖職者の扱い方についても、以上のような傾向が当てはまる。表3からもわかるように、現代の歴史叙述と比較してキリスト教に関連した項目が多いのは、年代記本来の性格を考えれば当然のことであるが(この点で特徴的なのはイヴァーン・カリターに関する記述よりも同時代の府主教ピョートルやアレクセイに関する記述のほうが多いことである)、焦点は、あくまでも、モスクワに府主教座が移転し、それが全ルーシの教会の中心になっていく過程に当てられている。表4に登場する聖職者の大半は、いわばモスクワ府主教座の独立に「貢献」した人物で占められているのである⁽³⁾。

以上を総合すると、この『シメオーノフ年代記』は、通説どおりモスクワ国家の正統性というイデオロギーにそった年代記であることがわかる。こうした傾向は比較の対象として取り上げた現代の年表でも同様であり、周辺国家や民族の動向にも気を配っているとはいっても、今日でも、キーエフ・ルーシ→ウラヂーミル・スーズダリ公国→モスクワ国家→ロシア帝国というロシア史の本流図式が一般的であることを示している。

② 年代記は、13世紀前半のモンゴル人の侵入(バトゥの遠征)と14世紀後半以降のモンゴル人の後退(クリコフヴォの戦い、ウグラ河畔での逗留)といったモンゴル人の支配の始点と終点については記述しているものの、13世紀後半から14世紀後半のモンゴルによるロシア支配の全盛期については、ほとんど頁を割いていない。より正確に言えばロシアの宗主国としてのキプチャク汗国の存在に言及

していない。表5が示しているように、バトゥを例外とすれば、名前が頻繁に登場するモンゴル人の王侯は、すべてクリコヴの戦い以降の人物であり、さらに、特徴的なことに、今日の歴史叙述ではほとんど触れられることのないダニアル、ヤグブ、カスィムの三人の皇子は、「勤務皇子」(служилый царевич)という称号が示しているとおおり、ロシア側に「帰順」した王侯である。これに対して、汗国の全盛時代のトフタ汗、ウズベク汗の登場回数とともに2、3回程度と少ない。

このことは、モンゴルの支配を受けていたロシア側に、13世紀後半から14世紀前半のキプチャク汗国の政治情勢に関する情報が伝わらなかったことを意味するわけではない。むしろ、ロシア側は頻繁な「サライ詣で」によって、汗国の宮廷の動きには熟知していたと思われる。たとえば、6821 (1313) 年の項は、「新しい汗ウズベクが汗国に君臨し、イスラム教徒となった (обесерменился)⁽⁴⁾」(下線引用者)と述べているように、ウズベク汗のもとでの汗国のイスラム化についての知識を持っており、また6850 (1342) 年の項は、「ウズベクの息子ジャニベク汗は、自分の兄ティニベクを殺して、汗国に君臨した⁽⁵⁾」(下線引用者)と述べているように、ウズベク汗死後の宮廷紛争について正確な知識を持っている。

さらに年代記作者たちは、たとえば6847 (1339) 年の項が、「大公イヴァーン・ダニロヴィチは息子セミョーンを連れて汗国に赴き、息子アンドレイは大ノーヴゴロトに逗留するように派遣した。同年、大公イヴァーンは神とツァーリに自分の世襲地を下賜されて、汗国からルーシに帰還してきた⁽⁶⁾」(下線引用者)と述べているように、汗国=宗主国、ルーシ=服属国という関係についても熟知していた。

以上のことから判断すると、年代記作者たちは明らかに、ロシアがキプチャク汗国の支

配に入っていたという事実を意図的に曖昧にしようとしていると思われる。ハルペリンは年代記作者など中世ロシアの著述家のこうした姿勢を「沈黙のイデオロギー (the ideology of silence)」と呼び、こう説明している。

「沈黙のイデオロギーをすでに(キーエフ・ルーシ時代に……引用者)実践していたロシアの著述家たちが、やはり沈黙のイデオロギーに頼ったとしても驚くべきことではない。彼らは、モンゴルの征服を叙述するにあたってこれまでのやり方を踏襲した。ロシア人が抵抗して破れると、それは彼らの罪のためとされた。勝利を取れば、キリスト教の神の力と信仰の正しさが証明されるわけである。年代記は、モンゴルの支配時代の出来事を、それまでの遊牧民の侵入とそれに対する反撃の時代の用語を使って記録した。キーエフ・ルーシとその時代の遊牧民との戦争は主として断続的な軍事衝突から成り立っており、重大な政治的結果をもたらさなかった。著述家たちは、ロシア・タタール関係も同じ用語を使って記述することによって、モンゴル人たちが試合のやり方をかえてしまったことを否定しようとしたのである。ロシアの知識人たちは、モンゴル人を単にポーロヴェツ人の後継者にすぎないものと描き、ロシアの政治的地位が変化してしまったことを正面から論じることをさけた。13世紀から15世紀までのロシアの著述家や年代記作者たちは沈黙のイデオロギーを洗練したものすることによって、ロシアが征服されたという事実を否定したのである⁽⁷⁾。」

次に、年代記のなかに外国および外国人がどのように登場しているのかを整理することによって、中世ロシアの対外的地位ひいては外国観にアプローチしてみよう。

表6は年代記に登場する人物の民族(所属国)を、上位から整理したものである。表7、

はその中で西ヨーロッパに属するイタリア人とドイツ人の地位（職種）を分類したものである。

以上の表から、以下の諸点を読みとることができる。

① ロシア人、ロシア人聖職者⁽⁸⁾、およびロシアの統一をめぐるモスクワのライバルであったリトヴァ・ルーシだけで、78.1%を占めており、当然のことながら年代記はまず

自国史であった。さらに、ロシア人、リトヴァ人以外では、モンゴル・タタール系人、ギリシア人が上位二者を占めており、中世ロシアの対外関係の中心は、まずキプチャク汗国およびその後継国家、ついでビザンツ帝国であったことがわかる。

② これに対して、西ヨーロッパ人はほんの数%であるにすぎず、キーエフ・ルーシの解体から15世紀後半まで、西ヨーロッパとロシアは没交渉に近かったことがわかる。ちなみに、西ヨーロッパ人による中世ロシアの「再発見」の嚆矢となるドイツ大使ニコライ・ポッペルがモスクワにやってきたのは、1489年のことであり、この事件は、やっと年代記の末尾に近い560丁に登場してきている⁽⁹⁾。

③ ただし、表7が示しているように、主として15世紀後半以降ロシアと接触を持った数少ない西ヨーロッパ人のなかでは、建築家、貨幣職人、大砲職人といった技術者の比率が高いことは、注目すべきであろう。モスクワ公国を中心としてモンゴルの支配から自立し、西ヨーロッパ諸国との接触を開始しつつあった15世紀後半以降の中世ロシアは、ホロシケーヴィチのいささかステレオ・タイプ的な表現を借用すれば「他のヨーロッパ諸国と比較したルーシの後進性を清算すること、時代の要請と要求に対応していない文化水準を清算すること、すなわち汗国のくびきの結果を

表6 民族（所属国）の登場比率

順位	民族名（所属国名）	人数	割合
1	ロシア	889	56.1%
2	ロシア？（聖職者）	300	18.9
3	モンゴル・タタール系	165	10.4
4	その他および不明	53	3.3
5	リトヴァ	50	3.1
6	ギリシア	41	2.6
7	イタリア	19	1.2
8	ポロヴェツ	14	0.9
9	ドイツ	8	0.5
10	ポーランド	7	0.4
11	ハンガリー	5	0.3
12	リヴォニア	5	0.3
13	トルコ	4	
14	チェコ	2	
15	スウェーデン	2	
16	デンマーク	1	
17	ヴォルガブルガリア	1	
18	アルメニア	1	
19	ブルガリア	1	
20	ユダヤ	1	

表7 イタリア人

教皇	6
建築家	5
貨幣職人	2
銀職人	1
司祭	1
総督	1
枢機卿	1
教皇大使	1
大使	1
計	19

ドイツ人

皇帝	2
鉱山職人	2
大砲職人	1
職人	1
大使	2
計	8

清算することといった課題⁽¹⁰⁾」に直面しており、この課題を解決するために、技術者を西ヨーロッパから招聘し始めたのである。年代記の6999 (1491) 年の項は「この年の春3月26日、大公はドイツ人のイヴァーンとヴィクトールをペチョーラに派遣して銀山を捜させた⁽¹¹⁾」と記しているが、年代記の末尾ごろから登場し始めるこうした外国人技術者たちは、中世ロシアが西ヨーロッパと接触し始めるにあたって、まず目をむけたのは建築・工・鉱業技術であったことを示しているといえよう。

最後に、年代記に登場する人物の地位(職種)・階層を分析しておこう。表8は、聖職者以外の世俗の登場人物の地位(職業)を上位から整理し、あわせてその中でロシア人の占める割合を付記したものである。表9は、残りの聖職者の地位を上位から整理したものである。

表8 世俗的地位(および職業)

順位	地位	人数	ロシア人の割合	備考
1	公	382	78.9%	
2	ボヤール	111	97.3%	
3	軍司令官	87	82.3%	
4	大使	63	22.2%	モンゴル人28人(44.4%)
5	大公	55	87.3%	
6	汗	45	0.0%	ツァーリも含む
7	市長官	40	100.0%	ノーヴゴロト
8	公妃	38	92.1%	
9	皇子	27	0.0%	モンゴルのみ
10	公子	24	100.0%	
11	ボヤールの息子	22	100.0%	
12	大公子	22	100.0%	
13	大公妃	20	80.0%	
14	書記官	18	100.0%	
15	国王	14	0.0%	
16	皇帝	14	0.0%	
17	代官	10	100.0%	
18	大公女	9	100.0%	
19	イコン画家	9	100.0%	
20	千人長	7	100.0%	
21	リトヴァ貴族	6	0.0%	пан
22	キリチェイ	6	100.0%	
23	スルタン	5	0.0%	
24	急使	5	100.0%	гонец

25	オコリニチイ	5	100.0%	
26	ジーチイ	5	100.0%	
27	建築家	4	0.0%	
28	モンゴル貴族	4	0.0%	мурза
29	家臣	4	100.0%	слуга
30	大砲職人	4	50.0%	
31	勇士	4	75.0%	витязь
32	通訳	3	100.0%	толмач
33	商人	3	75.0%	купец
34	最長老	3	0.0%	старейшина
35	万戸長	3	0.0%	
36	皇妃	3	0.0%	
37	書記官補	3	100.0%	
38	汗妃	3	0.0%	
39	哲学者	2	0.0%	ギリシア人
40	長老	2	100.0%	староста
41	銀職人	2	50.0%	
42	騎士団長	2	0.0%	магистор
43	ゴースチ	2	100.0%	
44	千人長の息子	2	100.0%	
45	印刷職人	2	100.0%	
46	専制君主	2	0.0%	Деспот, ビザンツ後継国家
47	弟子	2	50.0%	
48	公女	2	100.0%	
49	鉱山職人	2	0.0%	ドイツ人
50	ホローブ	1	0.0%	
51	市長官の息子	1	100.0%	
52	石職人	1	100.0%	каменщик
53	千人長の妻	1	100.0%	
54	王妃	1	0.0%	
55	狩猟官	1	100.0%	ловчий
56	寝殿官	1	100.0%	постельник
57	指揮官	1	0.0%	モンゴル人
58	ヴェネツィア総督	1	0.0%	лож
59	君主	1	0.0%	
60	バスカク	1	0.0%	
61	養育係り	1	100.0%	кормильчик
62	窯たき人	1	100.0%	истопник
63	伝達者	1	100.0%	подвойский
64	召使	1	100.0%	человек
65	専制君主の息子	1	0.0%	
66	モンゴル騎兵	1	0.0%	улан
67	医者	1	0.0%	лекарь. ユダヤ人
68	士族	1	100.0%	
69	モンゴル戦士	1	0.0%	меченоша
70	地主	1	100.0%	
71	監督官	1	100.0%	
72	貨幣職人	1	0.0%	денежник
73	10分の1税徴税官	1	100.0%	десятинник
74	女皇帝	1	0.0%	
75	庶民	1	100.0%	

表9 聖職者

数	地 位	人数	備 考
1	主教	154	
2	府主教	51	
3	大主教	40	
4	大修道院長	22	
5	修道院長	22	
6	聖人	18	
7	修道士	10	инок
8	教皇	6	
9	始祖	5	праотец
10	司祭	4	священник
11	予言者	4	マホメットを含む
12	殉教者	4	
13	懺悔僧	4	духовник
14	補祭	3	дьякон
15	補祭長	3	протодьякон
16	司祭長	3	протопоп
17	使徒	2	ヨハネ、パウロ
18	枢機卿	2	
19	沈黙修道士	1	молчальник
20	教皇の大使	1	легат
21	司祭の子	1	попович
22	カトリックの司祭	1	каплан
23	寺男	1	пономарь
24	鍵番	1	ключарь

この2つの表から、以下の諸点を読み取ることができる。

① 世俗の人物および聖職者の順位が示しているように、登場人物の社会的地位と登場回数は明確に比例している。この意味で、年代記は、きわめて常識的な「王侯貴族と高級聖職者の歴史」なのである。

② 「ゴースチ」、「商人」がきわめて少なく（総勢3名）、また各部門の「職人」のなかでもその他の地位（職業）と比べて外国人の占める割合が高いことが示しているように、商人層、手職人層はほとんど政治的意義をもっていない。この点に関しては、こうした階層が政治の舞台に登場するようになるイヴァーン4世、「動乱時代」、ロマノフ朝の成立期をあつかった年代記と比較することによって、より明確となるであろうが、それは今

後の課題としたい。

③ この時代がモンゴルの支配時代であるにもかかわらず、この支配の象徴ともいえるべき「バスカク」が一名しか登場してきていないことである。このことは、「沈黙のイデオロギー」によっていることもさることながら、近年の研究で明らかにされたように、モンゴルの統治様式が、「バスカク」による統治から、14世紀以降は「ダルuga」および「ボソール（大使）」による統治へと変化してきたことに関連している（表8にあるようにモンゴル人の大使は44.4%を占めている⁽¹²⁾）。

「バスカク」による統治はむしろ短期間の一過性の現象としてとらえるべきであろう。

注

- (1) たとえば、外川継男氏の『ロシアとソ連邦』（講談社版「世界の歴史」第18巻）は、その構成上やむをえない面もあるが、クリコフヴォの戦いから、すぐにイヴァーン3世の時代に移っている。
- (2) G. Alef, *The Political Significance of the Inscriptions on Muscovite Coinage in the Reign of Vasilii II*, *Speculum* XXXIV, 1956, p. 1.
- (3) 興味深いことに、政治史ではなく宗教・文化史に焦点をあて、「ロシア文化の解釈史」という副題をもつピリントンの古典的著作も、年代記の様式に同調している。彼はこう述べている。「たぶん、1326年に府主教座がウラヂーミルからモスクワに移ったことは、モスクワが国家的指導権を握っていくうえで、その翌年にタタール人がモスクワ公イヴァーン・カリターに「大公」の称号を与えたことよりも重要な礎石であったことであろう。14世紀のモスクワ府主教、この高い地位を占めたはじめてのモスクワ人アレクセイは、国家的指導権を確立するうえで、カリターや他のどの初期のモスクワ公よりも重要であったことであろう。」 J. Billington, *The Icon and the Axe: An Interpretive History of Russian Culture*, N. Y., Vintage Books Edition, 1970, p. 49.
- (4) ПСРЛ, том 18, стр. 88.
- (5) там же, стр. 94.
- (6) там же, стр. 92.
- (7) C. J. Halperin, *Russia and the Golden horde*,

Bloomington, 1985, p. 20.

- (8) 周知のように、ロシア地域の高位の聖職者はロシア教会の自立が進むまでは、コンスタンチノーブルから派遣されてきたギリシア人たちであった。しかし、だれがギリシア人であるのか確定することは困難であったので、ギリシア人であることが明確な場合を除いて、ここではロシア地域の聖職者はロシア人とみなすことにした。表6では「ロシア人?」とされている項目である。
- (9) 拙稿「西ヨーロッパ人による中世ロシアの『再発見』」(文教大学教育学部紀要20, 1986年)を参照していただきたい。
- (10) А. Хорошкевич, Русское государство в системе международных отношений, М., 1980, стр. 222.
- (11) ПСРЛ, том 18, стр. 274
- (12) ハルペリンは、バスカクによる統治からダルーガ・ボソールによる統治への移行はロシア側の抵抗によるものであり、この結果モンゴル人によるロシア支配は緩和されたという定説を批判して、この移行は汗国側の事情によるものであり、モンゴル人の支配は緩和されたわけではないとして、こう述べている。「バスカクに頼ることから、ダルーガとボソールを使用することに移行したのは、ロシアを統治する費用を少なくするためであった。遊牧経済の観点からすれば、ステップ地帯で役人を維持することは、森林地帯で維持することよりも安価であり、そのことによってもっと利益のあがる仕事に人材と資金を投入することができたのであろう。キプチャク汗国は14世紀末の危機以降にあって、現地不在の制度によってロシアを掌握することができたのである。」 C. J. Halperin, op. cit., p. 40.